



「終戦後、日本電気も仕事がない状態でしたので、自宅でラジオの修理を始めました。広告用アンテナを高く立てたのが良かったのか、遠方から古いラジオを持参する人もいて多忙でした。その部品の仕入先が秋葉原でした。当時、ラジオは贅沢品として高い税金がかけられ、私も税務署員と大喧嘩したものです。

昭和二十三年の夏、焼け野原に二坪ほどの店舗でラジオの組立販売を開始。神田須田町から小川町にあった露店商が、秋葉原に移転してくる一年前の事でした。私は戦後、部品の製造と販売を手掛けていましたが、当時の秋葉原の有力者と偶然知り合ったことから、秋葉原にバラックを建て、電気の小売を始めました。すでに秋葉原駅の線路沿いには、飲食店や衣類・雑貨等の露店が、終戦直後から三十〜四十店集まっていますが、この界隈で電気専門の小売は、うちが第一号でした。駅長の許可を得て、朝六時から八時までの二時間、レコードをかけて客寄せをしました。朝、店に並べた物は大半が、夕方には売り切れるほどでし



た。お客さんの中には軍服姿の人達も多くいました。

一番驚いたのは、名古屋の質屋が早朝に突然やって来て、店の品を全部くれと言った時です。相手は電器の素人でしたが、電器部品商を始めるといふことで、はるばる名古屋から荷馬車でやってきたのでした。全部持って行かれては商売に差し支えるので、半分で勘弁してもらいました。ちなみにこの人はその後、名古屋でも最大級の部品商となりました。当時、一番良く売れたのは部品より部品材料でした。とにかく、商品を買った代金をみかん箱に入れていたら、いくつも積み重なるほどでした。終戦前後の日本の電子工業が壊滅状態だった頃に、現在では電子部品、家電メーカーのリーダー格になっている人達もよく店頭に出入りしていました。例えば、パイオニア元会長の松本聖さん、アルプス電気元社長の片岡勝太郎さんは自分の工場で作った部品をリヤカーやリュックサックでよく持ち込んで来たものです。ソニーを始めとする家電メーカーの人達も、当時はよく部品調達でうちの店先に来られていました。

当時の駅前広場では、野球をする事も出来ました。それほど静かな駅だったということです。」